

▶ 第21回

ヴィブラートは心臓の動き

管 楽器のヴィブラートは歴史がまだ浅いのです。私が新響に入る前、奥 好寛さん、森正さんと三人だけがフルートでヴィブラートをかけていたんです。私が新響に誘われた時、新響内部で意見が2つに分れたそうです。「吉田っていうのはフルートにヴィブラートをかけるんでね。」という反対派がいたんです。昭和16年ですよ。そうすると、パリから20～30年遅れて、日本でヴィブラートがかけられたということです。他の人はほとんどノーヴィブラートだったのです。それからベルリン・フィルのかなり古いレコードを聴くと、オーボエはノーヴィブラートですね。シュレホフトさんという人がトップを吹いている時代はヴィブラートがなかったのです。ベルリン・フィルにオーボエのヴィブラートを持込んだのは、スタインスさんが元祖だと言われている位新しいのです。ほとんど戦争が終わる数年前ですね。

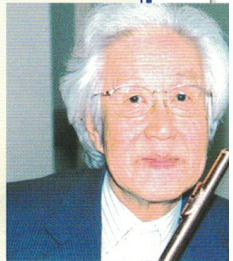
ヴィブラートは演奏にとって非常に大事なことです。モイーズ先生は、「音は体だ」と言っています。ヴィブラートは心臓の動きで、外部から体を観察した時に、心臓の動きが見えるのは病人だと言うのです。音の中にいつでもヴィブラートが隠れていて、それが音の表面に出てこないように、という注意をモイーズ先生はよく

言います。心臓が止まったら死んでしまいますよ。モイーズ先生のレコードをよくよく聴いてみると、あるレコードはかなりヴィブラートがはっきりしていて、あるレコードはヴィブラートが非常に少ないですね。その時のコンディションによって幾分違うと思います。

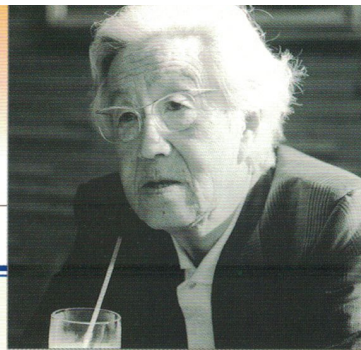
右の表は、往年の大歌手達のヴィブラートが1秒に約何回で、半音

を1とした場合の幅を表したものです。

500サイクルの純音での実験では、1秒間に6.5、幅は半音のヴィブラートが最も豊富な音色を与える最適条件であるという結果が出ているんです。歌の人が半音に近い数字を出していますね。ヴァイオリンの場合、クライスラー、エルマン、ハイフェッツ等11名の音の測定の平均値は、速度が7.1、幅が0.26で非常に幅が狭いのです。音の性質とか、高さ、音色感だとかいろいろな事が関係して、この幅が狭いのだと思います。ヴァイオリンであまり幅広いヴィブラートをかけたら、次のポジションをとるのに非常に苦勞するのではないのでしょうか。ヴァイオリンは、音域的にはフルートに非常に近いですね。フルートの場合には、大きな幅のヴィブラートは注意して下さいね。歌とヴァイオリンの中間をねらってヴィブラートを研究するのがいいかもしれません。しかし、ヴィブラートを意識的につけるのではなくて、自然につく迄待っていないとだめですよ。心が要求した時に本当のヴィブラートが出てくるのです。日本におけるヴィブラートは、奥 好寛さん達の功績だと思います。



歌手名	1秒間の速度(回数)	半音を1とした場合の幅
ガリークルチ(ソプラノ)	7.3	0.88
テトラッチーニ(ソプラノ)	6.8	0.74
ボンセル(ソプラノ)	6.9	0.96
シューマン・ハインク(アルト)	7.6	0.76
カルーソー(テナー)	7.1	0.94
ジーリ(テナー)	6.5	1.14
ティベット(バリトン)	6.6	1.14
シャリアピン(バス)	6.8	1.08



▶ 第22回

トリルと装飾音

トリルのことをよく質問されます。ジョネ先生にトリルのことでよくしかられました。特にモーツァルトの時代迄、トリルは原則として上からの方がいい趣味だと言われました。しかし、まず90パーセント以上守るべき第1の規則は、メロディーの最初の音は、トリルが付けられている場合、これは主音からです。2番目は、旋律線を壊す危険がある場合、主音からです。もう一つは、(アボジャトゥーラ)に付けられたトリルも、主音からです。しかし2番目と3番目は、必ずしも守られていません。1番目も場合によっては守らないことがありますね。テンポが速くて、主音からやると間にあわなくて五連音符になってしまうことがあるでしょう。トリルは、この3つを知っていれば応用がきくのではないのでしょうか。

大体モーツァルトまでの時代は、トリルについて、主要音論者(主要音から始めるという人)と、副次音論者(上の音から始める)の2つに分かれていました。上から始めた場合、一種の鋭さと、輝かしさが特徴であり、理論家はこれをよしとします。何故なら、それはアクセントのあると、その解決というふうに分けられるからです。一般的に、モーツァルト迄は副次音から始めるのが原則でしょう。

ジョネ先生に、「お前のトリルはいつでも退屈だ。指だけ動かしている。トリルで歌え。長いトリルは、スピードを変えるか、クレッシェンドさせるか、ディミヌエンドさせるか、何かの変化がなければトリルとは言えない。」と言われました。

モーツァルト以前の音楽の場合、トリルは上からやっていいか、主要音から始めるべきか、質問されても一概に言えないのです。おそらくモーツァルトは上からやったり、主要音からやったり、その状況でいろいろ変えたのだらうと思うのです。モーツァルトの直接の生徒であるフンメル

が、トリルは大体に於いて主音から、と書いた最初の人です。この本は、1828年に出版されました。ということは、モーツァルトは主音からのトリルも使ったのではないのでしょうか。トリルは全て主音からと書いたのは、ピアノのツェルニーです。これは確か1840年出版の本に書いてあります。この頃からトリルは主音からになってきます。トリルの演奏はとてもデリケートなことです。他の装飾音についても同じようなことが言えます。

例えば、ベートーヴェンの「交響曲 第7番」で、フルートとバスーンが、ユニゾンで装飾音を拍の上で演奏し、それが三連音符に繋がる場所があるでしょう(譜例1)。そこを合わせるに本



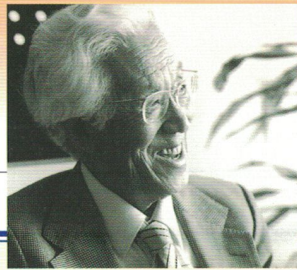
に苦労しました。亡くなった三田さんと、

「まだヨッチャン合わないなあー」と、何回も練習したものです。指揮者のシュヒターさんが、「前に出なさい。」と言うので、(譜例2)のようにや



ったら何でもなく合ってしまいました。指揮者によっても、装飾音を拍の上でやるのか、前に出すのか、意見が違いますので、原則的には拍の上ですが、その人の考え方でオーケストラが統一出来れば、どちらでもいいと思います。私は今までいろいろな指揮者とこの曲をやりましたが、前に出せと言ったのはシュヒターさん一人だけでした。シュヒターさんは絶対に合わないのを嫌いました。拍の上でやったら合いにくいと言っていました。

スコダの「モーツァルト 演奏法と解釈」の中でトリルのことをいろいろ解説しています。少なくともモーツァルトの音楽については世界的な名著ですから読んでみて下さい。この本は、トリル、装飾音に関して、単にモーツァルトの音楽だけでなく、一般的なトリル、装飾音の勉強に良い本です。



▶ 第23回

リズムとメロディー —そしてバッハの勉強の仕方

山 田耕作先生は「この道」の中の「あー」の箇所（譜例1）で *mf* を書いていますが、高

譜例1



い音は自然にアクセントの性質を持っているので、強調しすぎた演奏をするとかえっておかしい場合があります。歌詞のある音楽はとても難しいですね。

今度私は、バッハの「カンタータ 第151番」をやることになっているのですが、それを日本語で歌うというのです。そうすると、言葉によるアクセントとメロディーが全くずれてしまうのです。ドイツ語を日本語に訳しているの、歌舞伎を英語でやっているような変な感じになってしまうところが出てきて、アーティキュレーションに非常に困ってしまうのです。言葉に付けられたメロディーは、言葉のアクセントを忠実に守っているの、言葉で強く言うところは、必ず音楽では高い音を使っています。音の高さによるアクセントというのは、これを言っているのです。

アクセントには、記号によるアクセント(>・V・ハ・*fs*等)、長さによるアクセント(テヌート)、待つことによるアクセント(休止を長めにする)、そして音の高さによるアクセントがあります。拍子の裏(弱拍)が強くなりすぎてリズムが重くなったりしないように、特に注意しましょう。リズムが狂ってしまいますよ。高い音が出てきた時に、その音を強くしていいか、弱くするのか、よく考えないと危ないことが沢山あります。リズムばかり気にしていると、きたない音になってしまい、きれいな音ばかり出そうとしていると、リズムの方がおろそかになってしまう傾向があります。両方バランスがとれてい

ることが必要です。このことはよく自覚する必要があります。ほとんどの人がどちらかに片寄っていますね。このバランスがとれば名人ですよ。自分で、自分がどっちの方向にあるのかを、まず自覚して、自分の欠点を直す方向にもっていくのが、いい演奏家になる秘訣ではないでしょうか。

バッハの「クリスマス・オラトリオ」や「カンタータ 第151番」を勉強していると、バッハの偉大さを感じます。リズム感のあるところ、歌うところ、そして歌いながらリズム感を要求するところと、完全に作曲の上でバランスが見事にとれているということです。モーツァルトとハイドンは似ていますが、モーツァルトは歌の傾向が強いですね。ハイドンは非常に器楽的な傾向が強いですね。ハイドンの音楽というのはリズム感を大事に、モーツァルトは歌うことを大事に、これが基本だと思います。しかしバッハは両方を持っています。バッハはすごいですね。勉強すればするほど驚くべきことが、沢山発見できます。

ところで皆さんがバッハを勉強する時どんな所に注意して、と云うよりどんな方法でやっていますか。一番手っ取り早いのはシュミッツ博士の「後期バロック音楽の演奏原理」の中の特に「バッハ演奏への提言」を読むことです。

4つの段階があります。第1は明瞭さと明晰さ(ドイツ語だと二つの単語を使っていますが日本語に訳すと同じような一つの言葉になってしまいます)を目的にします。第2はその目的の為に分割すること、第3はその分割した個々の部分の意味を研究すること、第4はその各部分を総合すること。この総合が一番大切です。この総合の場合、直感力が働いていること。知的な分析だけでは駄目です。

モイーズ先生は常に、「自分の解釈はfeeling interpretationだ」と言われていました。そう言いながらモイーズ先生は、「ここはシンコーション、この音は倚音」と常に分析していました。モイーズ先生のレッスンこそ明晰である為の分割、分析研究、総合のお手本でした。

▶ 第24回

アーティキュレーション について

スイスのボスビルでモイーズ先生の夜の講習会が終り、ホッとして宿舎の食堂で一休みをしている時、夜10時頃ヒヨッコリ先生が来られました。私と向かい合わせに座られウスキーの水割りをチビチビやりながら私に熱っばい調子で「どう思う吉田、アーティキュレーションとはinflectionと言うほうが正しい」という意味のことを言われました。残念ながら先生の話される英語そのものがよくわからない上、inflectionの意味もよく理解出来ませんでした。その後、inflectionを字引で調べました。文語用語で、活用、語尾変化、抑揚、(声の)変化、などの意味で、モイーズ先生の言わんとしていることが何となく分かりました。何故先生があんなに熱心に主張されたか、要するに日本人の受講生のアーティキュレーションに何か不満があったのでしょうか。具体的に(譜例1)という音型で「ド」は良いが

譜例1 「シ」がいい加減だと注意されました。同じような注意を元フィラデルフィア管弦楽団の名オーボイス、タビユートーも言っています。この人もフランス人です。「一般的に教師が譜例の音型を『ティヤタタ』と言って教えるからいけない。『Tee Long Taa Tee』と言うべきである。」こう言うときスラーの第二番目の音が大事に演奏されます。

バロック時代の音楽ではアーティキュレーションは演奏家がやらなければならないことですが、その作品が作曲家によって、①アーティキュレーションが完全に書かれている、②部分的に書かれている、③ほとんど書かれていない、の三つが考えられます。①の場合はありません。ですから②と③の場合が問題です。簡単に言えばスラーをどう付けるかでしょう。このことは当時の調律法とも関係があります。そもそもバッハでさえ平均律を基本的に全作品を書いたとは言い切れません。ソナタ

の各楽章の調性をみて下さい。各楽章の調号は決して変わりません。バッハのフルート・ソナタ 変ホ長調、ト短調は、最近ではエマヌエル・バッハの作品とされ大バッハの作品からはずされました。変ホ長調、ト短調のソナタの第2楽章で調号が変わっている、即ち平均律になった時代の作品であるからです。それはそれ等の曲の作風からも言えることです。技術的にも1つのキーのトラヴェルソ・フルートでAsとかBはかなり吹きにくいです。4つのキーがあればAsもBも良い音が出せます。この変ホ長調、ト短調は4キーの楽器が出来た時代の作品でしょう。平均律の前の調律法が問題ですが、それは中全音律(ミーン・トーン)という調律法です。中全音律を説明するのは難しいですが、要するに長三度が平均律より狭く、純正な長三度になります。中全音律で鍵盤楽器を調律すると黒鍵がCis、Es、Fis、Gis、Bとなります。ですからDes、Dis、Ges、As、Aisという音は本来なくなります。事実1600年頃の音楽にはDes、Dis、Ges、As、Aisを使った和音はありません。旋律にはこれ等の音を使っている場合もありますが和音にはありません。これはデ・ラ・モッテという人の書いた「大作曲家の和声」(シンフォニア版)という本に書いてありますから興味のある方は読んでみて下さい。

それではバロック時代の音楽で具体的にスラーを付けても良い箇所を指示してみます。1)一連の数個の音が同一和音内の音である時。2)倚音が解決される時。3)後打音、又はそれに類する動きの時。4)シュライファー(英:スライド)。5)ターンの音型。6)旋律が下降的に動く場合はスラーが多い。7)三連音はスラーされることが多い。全部とは言えない。8)(譜例2)の「ミ」が刺繍音である場合。

譜例2 その他にも意識的にグループを作っていく為の場合等があり、余り一概には言えないでしょう。大体そんなところですが、基本的にバロック時代のアーティキュレーションはデタツシェ(音を一つ一つ切る)であることを忘れないで下さい。